

『現地講座の報告』

第 316 回講座 2010 年 6 月 7 日 明治神宮

## 明治神宮の杜を歩く 一第4回

秦 和寿

参加者： 16 名（会員 10 名 当日参加等 4 名）

案 内： 秦 和寿

### 森の造林

神宮の杜は、大正 9 年に創建され今年で 90 年となる。成長した木もあるから実質的にはほぼ 100 年の森といってよいであろう。広さは 70 万平方メートルで、今日では東京一の原生林的な森になっている。当時、この地は関東ロームの荒れ地で赤松類などしかなかったという。約 10 万本の献木と 10 万人の奉仕で一大緑地となったのである。

樹木は各地から寄進され、北は樺太から南は九州にいたった。

樹木は林学者本田静六博士らの造林計画にのっとり檜や椎、楠などの常緑広葉樹が植えられた。時の総理大臣大隈重信は、伊勢神宮の様に針葉樹の杉の造成を指示したが、林学者らが植物の特性をあげ押し切った。現在森を管理する沖沢幸二氏は杉を植えていれば貧相な森になっていたという（朝日新聞 22 年 10 月 27 日）。それはたぶん神宮の中に杉が植林された場所を類推してそのように指摘したと思うが、枝打ちをして日があたるように管理していけば、杉林も大樹林地帯になっていたのではあるまいか。

### 100 年の杜

この 100 年で樹木は原生林の様に育っているが、伊勢神宮と比べると暗い感じがする。楠類が多いためである。あまり落葉樹がないことも其の要因のひとつだろう。樹木の生長もそうだが、実はこの 100 年でなしたことは、土壌を造ったことが一番大きいのではないか。神宮の御殿自体は空襲で B29 の焼夷弾で焼け払われてしまった。ところが森は焼けなかった。落とされた焼夷弾は土中に深く埋まり発火しなかったのである。

落ち葉は除去することなく森にすべてもどしているの、数十センチの堆肥状となり、柔らかな土壌が形成されたことによる。土壌は次の 100 年への大きな財産となる。

### 御苑

原宿口から参道の代々木の木を見ながら御苑へ行く。この菖蒲は江戸時代の品種をそのまま継続していることが特徴である。菖蒲園は各地にあるが、多くの場合系統が明らかなものは少ない。

### 都心の森

東京でも明治神宮の森のように、園芸的な手法でなく植物や生態学的な発想のもとに維持していけば、都市環境でも自然を後世に伝えることができるのではないか。



写真：参道に架かる橋を歩く